

薄毛の花散里

——「葡萄蔓」をめぐつて——

津つ島しま昭あき宏ひろ

(本学教授)

一、春のことぶれ

新しき年のはじめ、長い冬を終えたことを喜ぶように生命の息吹がここかしこに立ち現れる。雪間からは色づきはじめる若草がすがたをあらわし、霞のなかからは木の芽がうちけぶる。人々のころもしぜんゆるやかとなるなか、まして新造された六条院のすばらしさは形容する言葉が見つからないほどであったという。『源氏物語』「初音」巻は、このように最大限の言祝ぎをもつて語り起こされることとなる。^(注1)

新春の六条院は紫の上が住まう御殿の描写をもつてまずは具体化される。極楽とも思われるその御殿では、長寿を祝う歯固めの儀が執り行われ、鏡餅も用意された。光源氏と紫の上とは末永き契りを込めた和歌を贈答することとなるが、始めから終わりまで祝意のムードが途切れず、明るさが充滿するのが「初音」巻の特徴だろう。

六条院の四季の移ろいが「行幸」巻まで七巻続く、その流れを導く序にあたる巻といえる。

続いて明石の姫君のもとでは、小松引きに遊ぶ女童らのすがたも見えて、これまたいかにも正月の明るい光景である。それでも、たしかに物語にはひととき暗い影が漂う。姫君を生母明石の君から引き離れたゆえに、光源氏は罪の意識を自覚するのだという。^(注2)とはいえ、その暗さは前景に大きく迫り出すことはない。五葉の松にとまる鶯の作り物に囁目した和歌を母娘が贈答することで、六条院の春の明るさは持続していくこととなる。

紫の上のもとへと、明石の姫君のもとへと訪れる光源氏は、立て続けに新春の挨拶に出向くこととなる。今度は夏の御方、花散里のもとにある。

夏の御住まひを見たまへば、時ならぬけにや、いと静かに見えて、わざと好ましきこともなく、あてやかに住みなしたまへ

るけはひ見えわたる。年月にそへて、御心の隔てもなく、あはれなる御仲らひなり。今はあながちに近やかなる御ありさまももてなしきこえたまはざりけり。いと睦ましく、ありがたからむ妹背の契りばかり聞こえかはしたまふ。御几帳隔てたれど、すこし押しやりたまへば、またさておはす。縹はげにほひ多からぬあはひにて、御髪などもいたく盛り過ぎにけり。やさしき方にあらねど、葡萄鬢してぞつくろひたまふべき、我ならざらん人は見ざめしぬべき御ありさまを、かくて見るこそうれしく本意あれ、心軽き人の列にて、我に背きたまひなましかば、

など御対面のをりには、まづわが御心の長さも、人の御心の重きをも、うれしく思ふやうなりと思しけり。こまやかに古年の御物語などなつかしう聞こえたまひて、西の対へ渡りたまふ。
〔初音〕三一一四六^(注)

夏の御殿というだけあって、新春には時季外れであるものの、気品漂う暮らし向きであることは他の御殿と変わりない。六条院丑寅の町に住まう花散里と光源氏はすでに男女の關係にないようなのだが、二人の仲らひは心の隔てのない、ある意味理想的なものでもあるらしい。それでも、花散里という女君の、「女」という部分に関して光源氏の評価は辛口だ。何もこれは「初音」巻に至つてのことではなく、これまでも同様であつたわけだが、ここの批評は相当に辛辣である。

光源氏は几帳を「押しやり」、花散里のすがたをまじじと見つめる。縹色の着物への言及も厳しいが、とりわけ女性美の核となる髪への言及が、「御髪などもいたく盛り過ぎにけり」とある。ここはどのような髪のすがたを語っているのだろう。色艶が失われていることもあるが、後続する叙述からは毛量の少なさを言うらしい。「やさしき方にあらねど」、それでも「葡萄鬢」で整えるべきだと光源氏は見ている。

詳しくはあとで確認することとなるが、この「葡萄鬢」はいわゆる「かもじ」のこととされているから、やはり「盛り過ぎ」た花散里の髪が少ないことを語っていると捉えておきたい。「我ならざらん人」なら、とうに見放している女君であっても、こうして我が身のそばで面倒を見続けることが「うれしく本意」にかなうのだとし、「わが御心の長さ」に陶醉するのはいつもの光源氏である。

花散里のもとを離れてからは玉鬢のもとへ、そして明石の君のもとへと訪れて夜を過ごす。もちろん二条東院に住まう末摘花や空蟬のことも忘れていない。彼女らを庇護し得る光源氏の懐の深さを指し示すこととなる。さまざまな女君のもとを訪れる光源氏は、愛を分かち与える点において理想的な色好みの体現者となり得ている。他方、巻のほどで臨時客の儀、巻の終わりには男踏歌の儀が描かれるといったように、正月の華やかな行事が「初音」巻に描かれ、その舞台が六条院であることをもって光源氏の王者性の問題が議論

されてきた。^(注4) 繰り返しとなるが、この「初音」巻は、ところどころわずかに暗さを胚胎させているものの、全体としては新年の明るい情景を写し取っていることは動かない。そうしたなか、光源氏が花散里の髪を見つめているところで、それが否定的に語られていることをどのように考えればよいのか。祝意に満たされるなかで、「いたく盛り過ぎ」た女の髪に目が留まる光源氏のすがたを考えたい。

二、「えびかづら」とは何か

花散里を「女」として見た場合、それが及第点とさええないのだと光源氏は見ていた節がある。華々しく明るい正月光景に似合わず、花散里の髪は「いたく盛り過ぎ」たものであった。物語内で彼女の年齢について言及はないから、はっきりしたことはわからないものの、初めて物語に登場した「花散里」巻から、ここで問題とする「初音」巻まで、年立上で十年以上の歳月が経過している。「今はあながちに近やかなる御ありさま」ではないともあったから、床離れするほどの年齢だったことは間違いないわけで、「いたく盛り過ぎ」た髪だったのも致しかたないといったところか。

それでも、理想的な「髪」へと復元すべく花散里になおも注文をつけるのは光源氏もいささか度を越している。「やさしき方にあらねど、葡萄鬘してぞつくろひたまふべき」、このように光源氏は花

散里の髪を夢想するのである。

すでに指摘されているように、「やさしき方にあらねど」とあるところは、大島本で「やさしき方にあらぬと」の本文である。^(注5) 大島本以外なら、みつともないほどではないにしても、という解になり、大島本なら、「みつともない格好をしてはいけない」と、源氏が花散里の心内を推測したものとなる。前者の解はまだマイルドであるものの、後者だとすれば、「いたく盛り過ぎ」た花散里の髪は矯正すべきものと光源氏が認識していたこととなる。どちらと決したいものの、大島本の本文だと、「葡萄鬘してぞつくろひたまふべき」とする打開策がなおのこと説得力を持つとう。

さて、ここに見える「葡萄鬘」は一般に「かもじ」を指し示す語だとされている。試みに『日本国語大辞典』を引いてみると、以下のように二つの語義が掲げられていることがわかる。^(注6)

えび・かづら「・かづら」【葡萄葛】

(1) ブドウ科の植物類の古名。ヤマブドウ、エビヅルなどの古名。《季・秋》

(2) 自分の髪の不足を補うために用いる、他人の髪を束ねたもの。添え髪。入れ髪。鬘（かづら）。髻（かもじ）。

当然、「初音」巻に見られる「葡萄鬘」は二番目の語義となり、そこに添えられる用例についても、当該例が掲げられている。一見、(1)の語義から(2)の語義へと派生する道筋については分かり

づらいが、(2)にあわせて示される『花鳥余情』の以下の説が一つ
 の見解を示している。

えひかつらしてそ 女のつくりかつらをえひかつらといふ
 蒲陶^(マテ)のつるににたる故なり

(源氏物語古注集成第一巻『花鳥余情』桜楓社)
 すなわち、『花鳥余情』は(1)にあたる植物としての「蒲陶(え
 びかつら)」の蔓と、「女のつくりかつら(「かもじ)」との形状の
 類似性から(2)の語義が生まれたのだとしているわけである。『源
 氏物語』に「えびかつら」の語は一度しか出てこないから、この『花
 鳥余情』の注釈も「初音」巻にあたるものである。実は、『日本国
 語大辞典』以外の辞典類、『古語大辞典』の類にあたってみても、(1)
 (2)の語義を掲げておりほとんど変わりが無い。用例もまた、「初音」
 巻のそれを掲げる点で共通している。『源氏物語辞典』の類にあたっ
 てみても同断であった。

しかし、『花鳥余情』が記すように、かもじとの形状の類似性か
 ら「蒲陶」が持ち出されてくるのであれば、蔓植物は何も「蒲陶」
 に限らない。そしてまた、(2)の語義としての「えびかつら」な
 る語が「初音」巻以外に見られないことからしても、これを直ちに
 髪を補うかもしと理解するのはいかがなものだろう。むしろ、
 『新明解古語辞典 補注版』が、

(1) ヤマブドウの異名。〔和名抄〕

(2) 未詳。ビナンカズラの類で、髪を繕うものか。一説に、
 かもじ^(注7)。

とするように、「未詳」として留めるのが親切な説明なのかもしれ
 ない。分かることとしては、(2)の語義としての「えびかつら」
 なるものが「初音」巻に一例しか見えず、それが「いたく盛り過ぎ」
 た女の髪を補正するもの、手段であるらしい、ということだけだ。

『源氏物語』が成立する平安期のみならず、古代から中世の文学
 作品に(2)の語義をもつ「えびかつら」の用例を見出すことはで
 きない。それだけでなく古記録・古文書の類を通覧してもそれに出
 くわすことはなかった。(1)の語義であっても、以下にも掲げるが、
 『古事記』・『日本書紀』・『風土記』にわずかながら見られ、その他では、
 『和名抄』や『本草和名』等の辞典・事典類が語義を簡略に示すも
 のばかりで、現行の辞典・事典類もそれらを承けたものだといふこ
 とだ^(注8)。

要するに、「えびかつら」という語は用例が限られたものだとい
 うことになり、「初音」巻で光源氏が「葡萄蔓してぞつくるひたま
 ふべき」と考えたのも、何らかの意図をもって意識的にこの語を用
 いたと理解すべきなのではなからうか。少なくとも、女の髪の不足
 を補う「えびかつら」という語やモノが流通していたから「葡萄蔓」
 の語を持ち出した、ということではなさそうである。

そもそも『花鳥余情』が「蒲陶のつるににたる故なり」としたの

はなぜだろう。当然そこには、(2)の語義を導く(1)の語義があったわけで、(1)の用例にあたる記紀神話の事例を踏まえたものであったはずだ。そうした意味において、「初音」卷に見える「葡萄鬘」なるものは、『花鳥余情』よりも先行する『紫明抄』や『河海抄』が掲げる以下の注釈の方をまずは見るべきであった。

えひかつら衣比鬘也 日本記云 伊弉諾尊 投^{ナゲテ}黒^コ鬘^{ミツツラ} 此即化^{ナメ}成^{ユビニ}蒲陶^{ハツタウ}

〔紫明抄〕角川書店

えひかつらしてそつくるひ給へき 日本記云伊弉諾尊 投^{ナゲテ}

黒鬘^{コミツツラ} 此即化^{ナメ}成^{ユビニ}蒲陶^{ハツタウ} この故にかつらをえひかつらといへるなり

〔河海抄〕角川書店

両者の注釈書はいずれも、記紀神話における黄泉国訪問譚を指摘するにとどまる。つまり、「初音」卷における「えびかづら」が髪の不足を補う「かもじ」であるか否かといった言及はなく、それを暗示するのに留まるものだ。だから、「えびかづら」の語義を理解する上で、あるいは「初音」卷の本場面を理解するうえで、『花鳥余情』の説明の方が便利だったということなのだろう。とはいえ、『花鳥余情』が記紀神話を視野に入れていないはずはない。むしろ、黄泉国訪問譚の内容から「蒲陶のつるににたる」と注したと思われる。文学作品あるいは史料類において「えびかづら」の語がまず見られないことからしても、光源氏がこの語を用いた背景として、黄泉

国訪問譚に見られる「えびかづら」を踏まえたと考える方が妥当であろう。

三、黄泉国訪問譚の「えびかづら」

周知のところだが、確認のために問題となる黄泉国訪問譚の箇所を引用しておこう。

伊耶那岐命、黒き御縵を取りて投げ棄つるに、乃ち蒲子生りき。是を撫ひ食む間に、逃げ行きき。猶追ひき。亦、其の右の御みづらに刺せる湯津々間櫛を引き闕きて投げ棄つるに、乃ち笋生りき。是を抜き食む間に、逃げ行きき。且、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾くして、御佩かしせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。

〔古事記〕上巻、四七

伊耶那美命を追って黄泉国に訪問した伊耶那岐命であったが、伊耶那美命の変わり果てた醜いすがたを目の当たりにしてしまう。「吾に辱を見しめつ」(同)と、怒れる伊耶那美命によって派遣された「予母都志許売」(同)に追われる身となった伊耶那岐命は、呪法をもつて追っ手を払うというところである。「黒き御縵」を投げつけた際

に変化したのが「蒲子」であり、これが「えびかづらのみ」と読まれるものである。あわせて、同じく投げつけた「御みづらに刺せる湯津々間櫛」が「筍」となったのと並列的に考えることができようが、いずれも類感呪術と見てよい。よって、『花鳥余情』が記したように「御縵」と「蒲子」とが「にたる故」に類感呪術となるのだ。

「蒲子」にしても「筍」にしても、また「黄泉ひら坂」で登場する「桃子」もそうだが、どれもが生命力あふれる自然の力を象徴したものである。そしてまた、「黒き御縵」や「御みづらに刺せる湯津々間櫛」も、絶えず伸び続ける髪に対して神聖視する発想を外して考えることはできない。本居宣長『古事記伝』は、「すべて加豆良に三の品あり、葛と鬘と髪となり、(中略)かくさまぐあれども、本は一より轉れる名にて、草の葛より出たり」としており、葛・鬘・髪それぞれが通底することは前提として押さえて良いだろう。

さて、ここでは「是を撫ひ食む」とあるからそれを食用にしていたことが分かる。「予母都志許売」が本来の目的も忘れるくらいだから、「蒲子」は美味であったとともに、追っ手を阻むだけの呪力を認めていたのだろう。

ただ、「えびかづら」を食用として用いたという例、これまた古代よりここを除いて諸書に見えない。神話のなかに見えるぐらいだからそうした例があつてよいものの、そうした事例、記事は見当たらない。例外的なものとして、飲用としたのだろうか、釈蓮禪の詩に、

冬天延客式遊時 坐臥爐辺鐘漏遲
蒿蕪火温眠炙手 蒲萄酒美醉開眉
前談今夜雪中尽 後会明春花下期
戲論狂言皆口業 翻之争作善根詞

(『本朝無題詩』^(註10))

「蒲萄酒」が見えるのみである。寒い時期に暖をとって「蒲萄酒」を飲んで憂いを忘れよう、といった内容だろうが、果たしてこの詩をもつて「蒲萄酒」を日常的に飲用したとまでは言えないのかもしれない。著名な王翰の「涼州詞」にも「蒲萄美酒夜光杯」と見えることから、先行する詩句を踏まえた創作なのだろう。

紫葛 和名衣比加都良之祢

蒲陶 和名於保衣比加都良

(檳佐知子『医心方 卷一 B 薬名考』筑摩書房、一五四・三一九)

紫葛 味甘苦寒无毒。和恵比加川良。似葡萄紫色。三月八月採

根日干。

(『康頼本草』続群書類従・第三十輯下・雑部四四四)

葡萄 味甘平无毒。和於保恵比七月八月採之常食之不老。

(『康頼本草』雑部四五〇)

飲食用の事例はまず見えない一方で、わずかながらだが、『医心方』、『本草和名』といった医書や本草書に見られることから、飲食用の果実というより薬用の側面の方が認識されていたと考えられ

る。であるなら、なおのこと古代において「えびかづら」の呪性を認めていたことは間違いなさそうである。

ちなみに、「えびかづら」の語を構成する「えび（葡萄）」の語については「葡萄色」「葡萄染」といったように、染め色や織物の語彙としては、『源氏物語』も含めて文学作品や史料類に多く見出すことができる。本来は「えび（葡萄）」を材としたところからの名称だろうが、それでも、植物・果実の意として「えび（葡萄）」が登場することはないのである。ましてや、髪を補う具としての「えび」の語などは見られない。

これまでの考察を踏まえてあらためて確認するなら、光源氏が花散里の髪について、「葡萄鬘してぞつくろひたまふべき」としたところは、かなり特殊な語を用いたとするほかはなく、『紫明抄』や『河海抄』が注したように記紀神話に見られる黄泉国訪問譚を下敷きにして理解しなくてはならないはずだ。

ただ同じ古注釈でも、以下のように見る向きもあったことを言い添えておこう。

えひかつらして 日本記に伊弉諾尊^{ナケノミコ} 投^{ナゲ} 二黒髪^ヲ 此即化成^ニ 葡萄^{エビニ} 一
これよりかつらを葡萄^{エビ}かつらと云也つくろひ給へきとハかつ
らをそへたきとにや 女のつくるかつらを云也多ひのつる
に、たる故也日本記の説までも不^レ及只き、のよきやうにか
ける事此物かたりのならひ也こ、にかきらすかつらとかける

よりも多ひかつらとかけるかき、よき也

（源氏物語古注集成第二十三卷『林逸抄』おうふう）
『林逸抄』は『紫明抄』や『河海抄』よりも時代が下った注釈書であるからか、その理解の仕方は現代のそれに近い。「日本紀」を引きつつ「かもじ」としての「えびかづら」の語源説を表し、「えひのつるに、たる故也」との根拠も示すが、それがかえって「日本記の説までも不^レ及」であるとして、『源氏物語』の「ならひ」として、いわば文飾として「えひかつら」の語が出ているに過ぎないのだとする。要するに、古代神話を下敷きとするには及ばないといった理解なのである。

「初音」巻の場面解釈として、「葡萄鬘してぞつくろひたまふべき」を分かりやすく理解するには、「いたく盛り過ぎ」た女の髪を補正する、という文脈なのだから、「葡萄鬘」を「かもじ」とすれば事足りるわけである。もちろん、それはそれで合理的な理解となろう。ただ、繰り返しとなるが、使用が限られた特異な語彙をことさらに光源氏の心中に用いたということは、文脈に適合しやすすい「かもじ」とする理解のみならず、その典拠を十分に生かした解釈の方が有効なのではなからうか。

四、かづらの力

総じて身体を飾る装身具には呪術的な働きのあることが知られるが、頭髮に関わるものもそのひとつである。髪の毛や櫛にまつわる迷信が現代でも存在していることからしても、死してなお伸びるとされる毛髪への古代人の観念は特別なものがあつた。櫛や髪が「奇し」に通ずるゆえんである。^(注)『源氏物語』でも天皇が新しき斎宮に櫛を挿す別れの御櫛の儀は、神に仕える巫女として聖別化する行為として描くとともに、離れゆく者同士の内面を語るといふ高度に文芸化されたものとなっている（『賢木』二一九三）。

先の記紀神話に見る通り、「かづら」もそうした呪術的な力が濃厚であることは論を俟たない。髪に髪か何かを付与することは、その靈力を身につけることとなること、スサノヲがクシナダヒメを櫛と刺すことから分かるし、『万葉集』の「かづら」の諸例から窺える。さまざまな植物を髪飾りとしたものをさすが、「天宇受売命」が「天の真析を縷」^{あめまさき かづら}（『古事記』上巻・六五）として神懸かりしたなどとなどは始原の意味を教えていよう。また、蔓が強靱で這い広がる蔓性の植物、それ自体を「かづら」と言うが、その自然の靈力ゆえに神事・祭事では多く用いられ、特に賀茂祭の際に「あおいのかざし（二葉葵）」を挿すことは有名である。参考までに平安時代の「かづら」の諸例を『栄花物語』より引いておこう。

右宰相中将の、五節に御髪申されたるついでに、筥一双に薫物入れて遣はす。

（『栄花物語』巻八「はつはな」一一四二三）

もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらん

（巻八「はつはな」一一四五七）

ゆふしでの日蔭の髪よりかけて豊の明のおもしろきかな

（巻十「ひかげのかづら」一一五一五）

一例目は五節の舞姫の冠に日蔭の髪が用いられるもので、二例目は賀茂祭に使用される「もろかづら」、すなわち葵を桂の枝に付けたものを歌に詠み込んだものである。また三例目は大嘗会に際して「ゆふしでの日蔭の髪」が見え、これが巻名ともなっている。

他にユニークなところでは、『枕草子』「上に候ふ御猫は」段に、「三月三日、頭弁の、柳かづらせさせ」（三九）とあって、「翁まろ」と呼ばれた犬に藤原行成が柳の髪を付けさせているものが確認できる。ふざけて行つたのだろうが、三月三日の節供ゆえのことだろう。神事・祭事・節会など、貴族のしごく日常的な光景に「かづら」は溶け込んでいたと言つてよい。それだけハレの場を支える、自然の力、かづらの力が求められていたわけである。

このように、さまざまな植物の髪飾りを「かづら」と呼ぶ一方で、髪が薄かったり短かったりした際に、その不足を補うものも「かづら」と呼ばれることとなる。現在では「かつら」「ウィッグ」の語

が広く使われ、「かもじ」・「添え髪」・「付け髪」という語も知られていよう。ただ、古代までは「かづら（かつら）」という語が一般的であり、「つけがみ」の語彙が古記録類でわずかに見えるのみである。^(注12)

本論ではひとまず「かづら」の語で以下統一したいと思うが、こうした自身のものではない髪の毛をもって自身の髪を補正するものは、いつごろから生まれ、どのように定着してきたのだろうか。

朝服 一品以下、五位以上は、宝髻及び褶、烏去てよ。以外は並に礼服に同じ。六位以下、初位以上は、並に義髻着せよ。^(注13)

（日本思想大系『律令』『衣服令』第十一条「朝服」）
我が国における「かづら」の源を探るのはなかなか難しいようで、掲げた養老衣服令が遡りうる最も古い史料の一つである。女性の朝服の箇所に「義髻」という語が見えており、『令義解』が「謂。以他髻」。髻「自髻」。是為「義髻」。（新訂増補国史大系第二二卷・二一七）としていることから、これを「かづら」の古い例と認めてよいだろう。^(注13)

神事や祭事に植物の「かづら」が求められていたように、人毛を用いた「かづら」がどのような状況において利用されていたかについては、平安文学の諸例から考えていくことが妥当なようである。そこで分かることとして、一番に特徴的なことはどうやらそれは女性に特化した装身具であつたらしいということである。ひとまず『枕

草子』の事例を取り上げてみよう。

昔おぼえて不用なるもの 縹縹ばしの畳のふし出で来たる。唐絵の屏風の黒み、表そこなはれたる。ゑしの目暗き。七、八尺のかづらの赤くなりたる。葡萄染の織物、灰かへりたる。

（『枕草子』「昔おぼえて不用なるもの」）
見苦しきもの 衣の背縫、肩に寄せて着たる。また、のけ頸したる。例ならぬ人の前に、子負ひて出で来たる者。法師陰陽師の紙冠して祓したる。色黒う、にくげなる女のかづらしたると、髻がちにかじけやせやせなる男、夏、昼寝したるこそ、いと見苦しけれ。

（『枕草子』「見苦しきもの」）
前者は、かつて美しかったり何か働きのあつたりしたもの、時が経ってその用をなさなくなったものを列挙している類聚章段である。色褪せしている「葡萄染の織物」に並んで「かづら」が見える。だから、「かづら」の美しき黒色が赤色に退色したことを言っているらしい。それにしても、「七、八尺」とは相当の長さで、そこからも女性用であることが分かる。後者は、身につけるものや身体的特徴、しぐさや振る舞いを通じて「見苦しきもの」を列挙する段である。ここも言葉の連想や類比による事物が並ぶが、「色黒う、にくげなる女」と「髻がちにかじけやせやせなる男」とが対置される。男々しさを象徴する「髻がち」と貧相な男の体つきのアンバランスさを取り上げたのだとすると、色黒で醜い女が「かづら」をするこ

とが不似合いなのだと言いたいらしい。そして、二人が夏の昼に共寝している姿など論外だとする。ここからやはり、「かづら」は女的美質を演出するものということが理解できる。

殿泣く泣く、「かくは思ひたてまつりけんや。禿におはしまししをりは、尼そり、居丈にこそ見たてまつりしか。あはれに悲しきこと」と言ひつづけ泣かせたまへば、院の内もどよみ泣きたり。御髪のがせたまへる、うるはしき鬘のやうにて、六尺ばかりなり。〔栄花物語〕卷二十五「みねの月」二一四八二）
 姫、「己が主ニテ御マシツル人ノ失給ヘルヲ、繚フ人ノ無ケレバ、此テ置奉タル也。其ノ御髪ノ長ニ余テ長ケレバ、其ヲ拔取テ鬘ニセムトテ抜ク也。助ケ給へ」ト云ケレバ、

〔今昔物語集〕卷二十九第十八「羅城門登上層見死人盗人語」
 毛髪の「かづら」は右の例も参考になろう。『栄花物語』の例は、寛子の臨終時に父道長が立ち会って、娘の御髪を下ろして尼になすところである。幼児のころの「禿」から少女期の「尼そり」の長さへ、さらには「居丈」の長さへと、娘の成長を髪が伸びゆく点に見ているのは興味深い用例である。女としての美質が成長とともに増幅したにもかかわらず、それを削がねばならぬ苦衷が語られるが、その長さは六尺ほどで「うるはしき鬘」のようであったという。先の『枕草子』の例と同じく、女性用として相当な長さの人毛をもつて鬘が作られていたことが知られる。『今昔物語集』の例は芥川龍

之介『羅生門』のもとの話だが、亡き主人の「若キ女」の髪が長いのを利用して、老婆が「其ヲ拔取テ鬘」にしようとするところである。過酷な状況下の話だから割り引かなくてはいけないものの、こうして落飾時のみならず死去した際に髪がかづらとして活用されることもあったことがうかがえる。^(注1)

讃岐の守伊祐が妻の、よき鬘持たりと聞て、「借りて」と言ひしかば「睦まじう語らふなめり、かゝる事までに言ふは」と、妻なむ言ふ」と言ひしに

疑ふを苦しと思はば玉かづらかみをかけても誓ふ計ぞ

返し、伊祐

思ふ事なきにもあらず玉かづらかみをばかけじいな煩はし

（和歌文学大系『赤染衛門集』一六一・一六二）
 面白い例としては、右の『赤染衛門集』に見えるものである。伊祐の妻が「よき鬘」を持つと知った作者が伊祐にそれを借りるよう依頼したのだが、結果、妻から関係を疑われるというものである。「かゝる事までに言ふは」に端的なように、身体に着ける装身具の貸し借りは、やはり近しい者同士に限定されるのだらう、だから疑われるのだと考えられる。それだけ人毛から作られる「かづら」は貴重なもので、貸し借りも行われる女にとつて欠かせぬアイテムだったようだ。^(注2)

平安文学におけるかづらの実例についていくつか見てきたが、そ

の形状・製法ならびに用途まで知ることができる意味で、以下の『源氏物語』の例を引かないわけにはいかないだろう。

形見に添へたまふべき身馴れ衣もしほなれたれば、年経ぬるしるし見せたまふべきものなくて、わが御髪の落ちたりけるを取り集めて鬢にしたまへるが、九尺余ばかりにていときよらなるを、をかしげなる箱に入れて、昔の薰衣香のいとかうばしき一壺具してたまふ。

「たゆまじき筋を頼みし玉かづら思ひのほかにかけ離れぬる

故まものたまひおきしこともありしかば、かひなき身なりとも見はててむとこそ思ひつれ。うち棄てらるるもことわりなれど、誰に見ゆづりてかと恨めしうなむ」とていみじう泣いたまふ。

〔蓬生〕二一―三四二

常陸宮の姫君である末摘花は、一番に頼りにしていた乳母子の侍従が離れ行くにあたって饒別を授ける。荒れ果てる宮邸に頑なに暮らし続ける末摘花を残し、後ろ髪引かれながらも侍従は去って行くが、姫君には形見となるような着物もないため、抜け落ちた自身の髪を「鬢」にして渡したのだという。^(注16)「九尺余ばかり」とあるからこれまで掲げた資料のなかでも一番の長さを誇り、彼女にとって唯一の美点が髪の毛であることがよく分かる。抜け毛をかづらに仕立てる事例であり、女性用のかなりの長さを有するものである。そ

れとともに、着物の次にあてられる饒別として選ばれていることは注意されるだろう。着物が禄や饒別として利用されるのは、身につけた者の霊力が宿るものだからであり、とすれば、^(注17)「この「かづら」を饒別としているのも同様の觀念が作用していよう。つまり、「かづら」が守護する具、呪具となつているといえよう。

五、黒髪の春

髪にまつわる人生儀礼には、髪置き、髪削ぎ、髪上げなど出てくる。健康や成長を証する儀礼に関わることは、髪が人間の命を端的に象徴するものだったからであろう。宣耀殿の女御芳子の髪が長く豊かであったと極端に誇張されている例は、『大鏡』一七、后妃としてふさわしき資格・生命力を語らんとしていると考えられる。他にも『うつほ物語』では、毛量の多さや髪的美しさが生命力そのものに結びつくとして、藤壺(あて宮)の美しき髪を見た典侍が、「よろづのこと忘れ、齡延ばはる心地」(おうふう『うつほ物語 全』「蔵開・上」五〇八)だとしている。誇るべき髪を有する者のみならず、周囲にまで影響を与えるというのだから、美しく豊かな髪は予祝的性質・寿福的性質を認めることができるのではないだろうか。

『源氏物語』でも同様のことが言えそうである。^(注18)光源氏が女君の髪に触れる印象深い場面として、以下を掲げたい。

「君の御髪は我削がむ」とて、「うたて、ところせうもあるかな。いかに生ひやらむとすらむ」と削ぎわづらひたまふ。「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを。むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、削ぎはてて、「千尋」と祝ひきこえたまふを、少納言、あはれにかたじけなしと見たてまつる。」(葵)二二(二七)

紫の上の髪の毛を光源氏自らが手入れをするのだという。紫の上の乳母である少納言が、「あはれにかたじけなし」と見ているところから見ても、それが夫婦の繋がりの強さを語るものといえよう。^(注19)同時に、「千尋」と祝ひ言を唱えるのは、伸びゆく髪に紫の上の弥栄と夫婦仲の永続を祈念するものとなっている。髪の毛の成長すなわち生命力であり、それを予祝しているわけである。

朝な／＼けづれば積もる落髪の乱れて物を思頃哉

(新日本古典文学大系『拾遺和歌集』巻十一・恋一・六六九・貫之)
かざしては白髪にまがふ梅花今はいづれを抜かむとすらん

(新日本古典文学大系『拾遺和歌集』巻十六・雑春・一〇一一・伊衡)

霜雪の白髪までにつかへ来ぬ君の八千代を祝ひおくとて

(和歌文学大系『続古今和歌集』巻二十・賀・一八八七・定家)
右に挙げた和歌は、いずれも髪が抜け落ちることや衰えたさまが窺えるものである。最初の貫之歌は、毎朝梳ることで抜け落ちる髪

の毛が、恋心による悩みに起因するものだとする歌である。恋の部立ではあるものの、抜け毛が精神的な不調と連動すること、これは古代も現代も共通する認識であろう。髪の状態は心身の健康を測るバロメーターともなるわけである。二首目は挿頭す白梅と自身の白髪との見分けがつかなくなるとする歌で、「いづれを抜かむとすらん」からは、白髪は「抜く」ものだとする観念が存在していたことが分かり、これも現代と結びつく点から面白い。「雑春」の部立を見るまでもなく、梅花咲く春の季節だが、この季節に白髪がふさわしくない、いわば忘むべきものとする発想があったと見るのは穿ち過ぎだろうか。詞書にある「内裏の御遊」の際に詠まれたことも、白髪を避ける背景にあらうか。もちろん、「白髪」であることは長命をも表そうから、三首目の定家詠のように、「君の八千代を祝ひおく」ものとなることもあらうが、老いの象徴であることは動くまい。

長さ美しく豊かな髪は健康そのものであり、逆に生命力の弱まりは髪の衰えとして現れ出る。『医心方』巻四でも、発毛促進法や白髪・脱毛の対処法などが紹介されており実に面白い。^(注20)さらに、生命を賭す出産にまつわり、髪への言及があつて注目される例が『うつほ物語』に見えている。

大将、「いみじうわづらひ給ひつれば、『御髪や落ちむ』と思ふこそ、いとゆゆしけれ」。宮は、「さるは、『少し人心地もせ

ば、院に参らむ』と思ふものを。『かくてやみぬるにやあらむ』と思ひしかば、いと恋しくおほえ給ひしものを」。

(おうふう『うつほ物語 全』『国譲・下』八一四)

妻である女一の宮が難産の末に男子を出産したあと、七日経って仲忠が声を掛けるところである。難産ゆえに「御髪や落ちむ」と仲忠は憂慮しており、「いとゆゆしけれ」からも分かうが、それは死をも連想させるのだろう。女一の宮自身がこのまま死ぬしれないと思っていたとある通りである。実際は、仲忠が女一の宮の髪を撫でて、「落ちげもなくめでたし」(同)とされるものの、抜け毛、脱毛が死に繋がる予兆としての、不吉な現象としても捉えられていたことを押さえておきたい。

いとささやかなる人の、常の御なやみに痩せおとろへ、ひはづにて髪いとけうらにて長かりけるが、分けたるやうに落ち細りて、梳ることもをさをさしたまはず、涙にまろがれたるは、いとあはれなり。

(「真木柱」三—三六〇)

『源氏物語』では右に掲げた鬚黒北の方の例も参考になろう。夫鬚黒との関係に悩み、心労が重なった北の方の姿は見るも無惨であった。梳ることも難しいとは、相当な脱毛量であったろう。その後、鬚黒に火取の灰をぶちまけるといふ奇行に至る北の方の、「御なやみ」の尋常ならざることを、この異様な脱毛ぶりによって語らせていく。先の女一の宮の例のように肉体的な死へと繋がるもので

はないものの、いわば異形とも呼ぶべき脱毛が精神の喪失、精神的な死へと繋がるものとなっている。

あらためて人間の髪は命のありかを占うものとなっていたのだと言えよう。長い冬を越えてようやく生命の蘇りが実感される時期に髪が注目されること、ゆえなくはないことであった。思えば与謝野晶子の歌にも、「その子二十櫛にながるる黒髪のおごりの春のうつくしきかな」(『みだれ髪』^(注21))とあった。「二十」という生命のほとばしり、女性性の象徴たる黒髪に対しての自負、それが「春」という季節とともに歌われている。当然、これは近代の事例ではあるものの、生命があらたに賦活されて蘇る季節、それが新しき年であり、春という季節であったことは古代とそれほど変わらないのかもしれない。

平安時代の貴族社会において正月は儀式や行事が目白押しであり、「初音」巻のはじめでは長寿を祝う菌固めの祝いが、中盤では臨時客が描かれ、また男踏歌の記事が巻末に据えられる。そうした公事・神事等が続けば正装・礼装が求められ、理容も十分に配慮されよう。古記録の正月の記事に「理髪」が見えるのはむしろ当然であった。^(注22)だから六条院に訪れた最初の春に、光源氏が女君の髪に着目するものもしぜん流れであったと考えられる。^(注23)彼の目が捉えたのは花散里の髪だけではなかった。

六、期待される髪

花散里と話し込んだ光源氏は、丑寅の町の西の対に住まう玉鬘のもとへ訪れる。まだ住み慣れておらず、整わぬ調度類もあるようだが、小ざれいにする住まいとともに、ここでも玉鬘の女としての美質に光源氏は着目する。

正身も、あなをかしげとふと見えて、山吹にもてはやしたまへる御容貌など、いとはなやかに、ここぞ曇れると見ゆるところなく、隈なくにはひきさらしく、見まほしきさまぞしたまへる。もの思ひに沈みたまへるほどのしわざにや、髪かみの裾すそすこし細りて、さはらかにかかれるしも、いとものきよげに、ここかしこいとけざやかなるさましたまへるを、かくて見ざらましかばと思はすにつけては、えしも見過ぐしたまふまじくや。

〔初音〕三一一四八

冒頭に示した花散里と同じく、身につける装束のありようから髪へと視点が移っていく。その美しさは一点の曇りもないなか、「髪の裾すこし細りて」と、花散里の描写から続くように髪のダメージが語られる。とはいえ、それは「もの思ひに沈」んだ内面的な苦しみがもたらしたかと源氏は意識するものの、玉鬘への来歴や過去への反芻は永続せず、むしろ「いとものきよげに」と反転する評価となる。

新春の華麗な御殿に住まう女たちの美しさを確かめていくこと。光源氏にとって、それこそが我が世の春を実感することに繋がるが、玉鬘のあとには戌亥の町に住まう明石の君のもとを訪れ、臨時客の盛宴の記事を挟んで、さらには二条東院に暮らす末摘花と空蟬のもとまで足を延ばすこととなる。

それぞれの女君の才覚も含めてさまざまな美質が語られていくなか、明石の君のところでも、

白きに、けざやかなる髪のかかりのすこしさはらかなるほどに薄らぎにけるも、いとどなまめかしき添ひてなつかしければ、新しき年の御騒がれもやとつましけれど、こなたにとまりたまひぬ。

〔初音〕三一五〇

と、白き表着にかかる髪への言及がなされ、「さはらかなるほどに薄らぎにける」とされつつも、「なまめかしき添ひてなつかし」だとして、玉鬘への評価と似通うものとなっている。源氏との関係性、自身の手元から引き裂かれるごとく姫君が源氏に迎えられた過去のことなどが、「薄らぎにける」髪に反映していよう。しかし、これまた源氏はそれに目を向けることなく、女としての「なまめかしさ」のみに目を向け、ついには「新しき年」に問題となることも構わず、わざわざ明石の君のもとで一夜を過ごす。

一方で、末摘花のもとへ出向いた時には、次のように語られているのだった。

いにしへ盛りと見えし御若髪も、年ごろに衰へゆき、まして滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目などをいとはしと思せば、まほにも向かひたまはず。

〔初音〕三―一五三

醜女として知られる末摘花だけに、髪への描写も容赦がない。ただ、もともと末摘花の髪は美しかったことで知られており、その美しさが一層彼女の醜貌を浮き立たせる仕組みであつたわけで、ここはその唯一の美質である髪までも、寄る年波にあらがえず「滝の淀み恥づかしげなる」ほどの白髪となつたことを語っている。^(注24)当然、それに付随して着るものから何から目も当てられない状況であつた。結局、光源氏は末摘花に対して「まほにも」向き合おうとしていない。

六条院に初めて訪れた春、女君の髪を光源氏は以上のように品定めしていたこととなる。玉鬘そして明石の君の髪にはダメージが認められていたものの、その原因となる彼女らとの過去については深入りすることなく、「美しき髪」として意識しようとしていた。また、末摘花については六条院に参入せず二条東院にいたこともあつてか、白髪となつたことを認めつつ、それと向き合おうとしていない。そうした流れにいたるはじめに、花散里の髪を見咎める場面があつたわけである。^(注25)

花散里の薄毛は、「少女」巻でも夕霧の目を通して「痩せ痩せに御髪少ななる」(三―一六八)とされていた。薄毛の花散里に対して、

光源氏は末摘花と同じく「まほにも向かひたまはず」とする対処もできたはずである。しかし、初めて春を迎えた六条院丑寅の町に住まう花散里に対しては、「葡萄鬘してぞつくろひたまふべき」と、より積極的な関わりかたをせざるを得なかつたようだ。光源氏が統べる六条院の世界にあって、それだけ花散里は意味をもつ女君でもあつたということであろう。

林田孝和は、『源氏物語』に見られる「降魔^{ガマ}の相」(魔除けの忿怒の相)の語を踏まえつつ、作中の醜女について以下のように述べている。

『源氏物語』の女主人公に、末摘花・花散里という源氏の愛妾としては不似合いの醜女を二人も登場させたのも、醜に異常な靈力を観じる原義の投影があるからではなからうか。結論からいえば、物語作者が醜貌に異常な靈力を――魔除けの力を認めたうえで登場させたのではなあるまいか。^(注26)

醜女としての「降魔の相」が認められる花散里であるなら、その力を發揮する呪性の片鱗を物語から引き出せるはずである。図らずも花散里の薄毛を補うものは「葡萄鬘」なのであつて、「予母都志許売」に向けて放たれたものと重なる。醜(しこ)なるもの同士がここに「葡萄鬘」を介して結びつくこととなるのである。

亦日本大國魂神を以ちて淳名城入姫命に託け祭らしむ。然るに淳名城入姫、髪落ち体瘦せて祭ること能はず。

〔『日本書紀』一一二七二〕

呪性の片鱗を探し求めるにあたっては、やはり古代的発想を参照しないわけにいかない。右に掲げた崇神紀六年の記事では、日本大魂神を淳名城入姫命に祭らせたという記事が見えており、髪が抜けて瘦せたことで姫命には祭る能力がないのだとしている。前と同じく林田孝和は白髪の末摘花について、「末摘花もこの淳名城入姫同様、神を祭る巫女としての資格が失われていたことがわかる」としている。^(注7)

光源氏が花散里の薄毛を見逃すことができないこと、それは新しき春を迎える六条院にとって、衰微や死をも連想させる忌避すべきことだったのではなかったか。生命力の豊かさ、繁栄を予祝するのにあたって、六条院に住まう花散里の髪は呪力ある「葡萄鬘」をもつて補正する必要があったのだ。

最後に、髪の補正を求める人生儀礼「髪置」「髪立」「白髪」ともを取り上げておきたい。子どもが三歳になるまで剃っていた髪をのばし始める儀礼で、このとき付髪を頭にかぶせることをする。「カミオキイワイ」と呼び、熊本県宇土郡では三歳の十一月十五日に氏神に詣でて、小豆飯を炊き祝宴を行う民俗も報告されている。^(注8) この儀礼を遡れば中世までたどることができるが、現代の民俗を『源氏物語』に直結させることはもちろんできない。それでも、紫の上の髪を自らの手で削ぎ、「千尋」と祝いの言を唱える光源氏に通底する

ところもあろう。これらは新年や春の儀礼ではないが、こうした髪を補正することは、新年や春においてより一層求められたのではなかったか、ひとまずそのように考えておきたい。

〔注〕

- (1) 三谷栄一「物語る日と文芸の発生」『日本文学の民俗学的研究』新装版、有精堂、一九八七年）参照。
- (2) 「初音」巻が描く理想的な正月風景は、そうであるがゆえに六条院世界に内在する矛盾を逆に照らし出す。室伏信助「六条院の春―初音巻の方法―」(『王朝物語史の研究』角川書店、一九九五年)、秋山虔「源氏物語「初音」巻を読む―六条院の一断面図―」(『平安時代の歴史と文学 文学編』吉川弘文館、一九八一年)、松井健児「新春と寿歌」(『源氏物語の生活世界』翰林書房、二〇〇〇年)等、多く説かれるところである。
- (3) 『源氏物語』およびその他の引用は小学館新編日本古典文学全集により、私に傍線・頁数等を付した。新編全集によらないものは各々明記した。
- (4) 深沢三千男「王者のみやび―二条東院から六条院へ(統光源氏の運命)―」(『源氏物語の形成』桜楓社、一九七二年)、河添房江「六条院王権の聖性の維持をめぐる」(『源氏物語表現史 喩と王権の位相』翰林書房、一九九八年)等。
- (5) この箇所における本文の異同と解釈については、室城秀之「花散里の髪」『源氏物語の鑑賞と基礎知識』第十八巻「初音・胡蝶・螢」、至文堂、二〇〇一年)に詳しい。
- (6) 小学館『日本国語大辞典』(第二版)により、用例等は省略した。

(7)『新明解古語辞典補注版』第二版(三省堂、一九七四年)。

(8)『和名抄』が「紫葛 本草云紫葛 衣比加豆良」とし、『本草和名』を引くが、いわゆる「かもじ」であるとは示されていない。

(9)『本居宣長全集』第九卷(筑摩書房、一九六八年)。

(10)本間洋「本朝無題詩全注釈二」(新典社、一九九三年)。

(11)髪のかつめの性質については民俗学の知見が有効であるが、髪に関する概括的な整理は橋本澄子『日本の髪形と髪飾りの歴史』(源流社、一九九八年)が至便である。装身具・理髪具に関わるものとしては、江馬務「装身と化粧」(『江馬務著作集』第四卷、中央公論社、一九七六年)、樋口清之「装身具史」(装道出版局、一九七二年)等参照。

(12)『和名抄』に「髪 釈名云、髪、音被、加都良」と見え、『類聚名義抄』でも「髪」の字に「カヅラ」の読みを与えている。

(13)『国史大辞典』(吉川弘文館)に載る、鈴木敬三「鬘」・「義髻」、山辺知行「鬘」の各項参照。

(14)その他、『うつほ物語』には「仮髻(すゑ)」なる語が見えるが、これは『和名抄』によれば女性の礼装時の添え髪のようなものである。文学作品に拠らなければ、『満佐須計装束抄』には「つけがみ」という語も見え、こちらは髪の短い年少者に添える髪のようなものである。古記録では、『小右記』万寿二年十一月十二日に舞姫の装束料具に「長鬘」、また『中右記』天治二年九月十四日には幼いがために「斎王着鬘」、さらに『殿暦』康和五年十二月九日には「付髻二紫糸」と見える。ちなみに、巖谷小波『大語園』(名著普及会、一九七八年)は六波羅蜜寺縁起に基づく「鬘掛地藏」という説話を掲げる。亡母の菩提を弔うために、貧しき娘が自らの髪を旅僧に布施として差し出す話で、それに由来する地藏菩薩立像が六波羅蜜寺に収められている。

(15)『赤染衛門集全釈』(風間書房、一九八六年)は以下のように「参考」

を掲げる。

詠歌の年代は長徳から長保にかけての頃、赤染四十歳前後であり、髪もそろそろ薄くなっていたのかもしれない。桂本詞書によれば「つかふへきことあり、かりて」となっており、公の行事では是非必要であったのであろう。119で考証したように長保年間には道長の娘、彰子の入内、立后という盛儀があり、この時のことかもしれない。清少納言も「いとさだすぎ、ふるふるしき人の、髪などもわがにはあらねばにや、所々わななきちりほひて」とかもじを用いており、『源氏物語』でも花散里の薄くなつた髪を見て源氏は「やさしき方にあらねど、えびかづらしてぞ、繕ひ給ふべき。」と鬘を勧めている。

(16)小林茂美「末摘花物語の神話的幻想」(『源氏物語の表現機構』おうふう、一九九六年)は、旅の安全を祈念する道祖神信仰に繋がるとする。以下の『伊勢集』にも、他所へ行く者に伊勢が鬘を送った歌が見え、それが「手向の神」となるとする発想が見える。

物へ行人にかづらをやるとて

けづりこし心もあるをたまかづら手向の神となるぞうれしき

(和歌文学大系『伊勢集』二二六)
ほかにも古記録には『御堂関白記』長和四年七月十五日、僧念救の帰朝にあたり「七尺鬘老流」が送られる興味深い例が見出せる。また、『三十二番職人歌合』(群書類従第二十八輯)には「鬘捻」なる職人が見え、「花鬘おち髪ならはひろひをきひねりつきてもうらまし物を」の歌が見える。

(17)折口信夫が「大嘗祭の本義」「ほうとする話」等の論考で取り上げた、「みたまのふゆ」という観念が想起されよう。

(18)『源氏物語』における「髪」の問題については神尾暢子「美的語彙と源語女性―毛髪規定の表現機能―」(『日本語学』一九八八年十一月)、

- 三田村雅子「王朝文化と性 黒髪の源氏物語―まなざしと手触りから」
 「源氏研究」一九九六年四月、「物語は髪をどう語るか―黒髪の物語史」(上智大学国文学科紀要)二〇一五年三月、河添房江「髪のエロティシズム」(性と文化の源氏物語 書く女の誕生)筑摩書房、一九九八年)、吉井美弥子「源氏物語」の「髪」へのまなざし」(『読む源氏物語 読まれる源氏物語』森話社、二〇〇八年)等、参照。とりわけ近年はジェンダーやエロティシズムの問題として議論が活発であったが、あらためて本論は髪習俗・信仰の観点から考察を施した。
- (19) 柳井滋「紫の上の結婚」(『柳井滋の源氏学 平安文学の思想』(武蔵野書院、二〇一九年)参照。

- (20) 横佐知子『医心方巻四 美容篇』(筑摩書房、一九九七年)。

- (21) 『定本 與謝野晶子全集』第一卷(講談社、一九七九年)。

- (22) 正月理髪の記事は、『御堂閔白記』寛仁二年一月三日、『小右記』治安三年一月二日、『殿暦』永久二年一月一日等に確認できる。

- (23) 注(2) 室伏信助の論を参照。

- (24) 嘉陽安之「初音巻の末摘花―「滝の淀み恥づかしげなる御かたはら目」を視点として―」(『人物で読む「源氏物語」第九巻―末摘花』勉誠出版、二〇〇五年)は、末摘花の「白髪」について呪性の観点から考察する。

- (25) 注(18) 河添房江の論では、花散里の薄毛と末摘花の白髪の「非エロティシズム」の髪が光源氏の心長さを表す一方、量の減った玉鬘や明石君の髪の「エロティシズム」を強調する役割があることを指摘している。

- (26) 林田孝和「源氏物語の醜女―末摘花・花散里の場合―」(『林田孝和著作集』第二卷、武蔵野書院、二〇二一年)。

- (27) 林田孝和「末摘花物語の「笑い」の形成」(『林田孝和著作集』第一卷、武蔵野書院、二〇二一年)。末摘花の髪と巫女性との関わりは、高崎

正秀「源氏物語の成立―末摘花伝承を中心に―」(『高崎正秀著作集』第六卷、桜楓社、一九七一年)参照。なお、宮田登「女の髪」(『ヒメの民俗学』青土社、一九八七年)は、以下の事例を紹介しており、本論でも示唆に富む。

よく田舎で、人は髪を梳くときは、かならず縁側の端近くではいけないといった。家内ですべきなのである。もし抜毛がその時、縁に落ち、それを鳥がくわえて飛び去り、たまたま神樹に巣を作ったりすると、その毛の持主は、気が狂うといったりした。つまり、女の髪は、神の意志が伝わる特殊な装置なのであった。

- (28) 柳田国男・橋浦泰雄『産育習俗語彙』(国書刊行会、一九七五年)、中村義雄『王朝の風俗と文学』塙書房、一九六二年)等参照。